

演習場面における大学生の理想自己・現実自己の差と 発言行動との関連

—評価懸念という視点を取り入れて—

上 瀧 惇 子¹・重 橋 のぞみ

The Relationship between Students' Utterance Activity and the Differences in their Ideal-Self and the Real-Self during the Seminars at College

—Adopting a Viewpoint of Negative Evaluation—

Atsuko Koutaki・Nozomi Jubashi

<問題と目的>

私たちは成長につれ、自分の気持ちや考えを他者へ伝えることが求められるようになる。しかし、全ての者がスムーズに行えるわけではない。生田・丸野・加藤(2001)は、授業中に積極的に発言する学生はあまりいないことを指摘している。特に、学生は教師、社会人は上司といった、評価を行う権威的な人物がいる場面で発言ができない者がいる。評価者のいる場面を最初に経験するのは小学校であるが、ここで発言に対する苦手意識を持つと、中学、高校、大学、成人してからでも、このような場面での発言に抵抗を持ち続ける可能性があると考えられる。倉島(2009)によると、学校臨床の場でよくある相談として、中学に入る頃から「人前で話すのが怖い」「人に注目されるのが怖い」といったものがある。一般に、青年期には多くの人がこのような対人恐怖的な心性を持ちやすく(倉島, 2009)、今日では神経症などの病態として直接結びつかないまでも、健常な一般青年においても対人恐怖の傾向である人見知りや過度の気遣い、対人緊張などの対人恐怖心性が認められるものが多く存在しており、青年期の発達過程においてもよく経験されるものと言われている(清水・海塚, 2002)。青年期は自分作りの時期でもあり、他者から見える自分への意識が高まることも関連している(倉島, 2009)。高校生では、自分の発言に対して他者からどう評価されるかといったことが、発言主体にとって重要になる(堀ら, 2002)。ここでいう「人」にはクラスメイトなども含まれており、必ずしも評価者の存在だけが発言に影響を与えるというわけではない。

岡野(1998)は、恥の感覚にとらわれやすく対人恐怖を経験しやすい人には、他人に認められたい、評価されたいという人一倍の欲求があり、それに圧倒されるかたちで対人場面での恐怖感が生まれると捉えている。

Watson & Friend (1969) は、評価懸念を「他者からの否定的な評価に対する心配、および否定的に評価されるのではないかという予測に対する心配」と定義しており、そこには「他者からこう思われたい」「こう思われたくない」という理想自己が存在していることが窺える。このことから、評価懸念の高い者は、同様に高い理想自己を有していると考えられる。試験の得点など、数値を伴った現実的な評価を行われる際には、多くの者が他者からの評価を気にするであろう。岡田・永井(1990)は、青年期後期において対人恐怖心性と自己評価との間に負の相関関係を見出し、現実自己と理想自己のギャップを青年が埋められないまま、低い自己評価のもとで対人恐怖心性が生じやすいことを指摘している。以上のことから、評価に対する認識と発言行動との関係を見ていく必要がある。

畑中(2003)は、会話中に自分の意見や気持ちなどについて表出しない行動を「発言抑制」と名づけ、動機やスキルなどの内的規定因別に5側面(「相手志向」「自分志向」「規範・状況」「関係距離確保」「スキル不足」)に分類している。発言場面において、相手のことを思いやりったり空気を讀んだりして、適応の手段として「言わない」という選択をする場合と、言いたい気持ちがあるのに「言わない」「言えない」場合があると考えられるが、この中で本人が不適応感をもつのは、言いたいのに言えない状態だと考えられる。畑中(2003)は自分志向による発言抑制を自分の利益や自尊心維持のために行われると説明している。マイナスの反応や評価を受けることへの恐れから発言ができないことであり、そこには「他者からこう思われたい」「こうでなければならない」という理想の姿があると考えられる。つまり、その理想を達成できそうにないと判断した時に、発言抑制という行動をとると考えられる。ところで、口に出して言うまでに、発言するかどうかの葛藤や抑制を経験した場合、現実的

には発言できていたとしても本人の中に「言えなさ」が強く生起し、その結果理想自己と現実自己の差が大きく意識されると考えられる。この場合、「言えない」「言わない」ではなく、「言えなさを抱えながら言う」ということになるだろう。その人の持っている理想自己・現実自己も含めて考えることで、人が抱えている言えなさをより広がりをもって捉えることができると考える。

ところで発言場面において理想自己と現実自己を捉えた研究は、友人との会話場面に関するものだけである(上瀧・重橋, 2015)。大学の授業は高校までとは形式が異なり、自由度が高くなる。大学生における発言場面の中でも言えなさがより顕著に表れる場面として、演習形式で行われる授業の時間が挙げられる。明確な答えがないため、気持ちや考えを自分の言葉で述べなければならず、また、異なる意見を持っている人物もいることから、自分の発言に対して反論を受ける可能性も考えられる。高校までの授業形式は主に挙手制であるため、それまでは発言せずに済んでいた者も、少人数で意見交換を行う場では、発言することを求められる。その分、周りからの評価、特に教員からの評価により敏感になるのではないだろうか。そこで本研究では、演習形式で行われる授業の時間における発言行動と評価懸念の高さによって、理想自己と現実自己のズレの大きさに違いがあるのかどうかを検討することを目的とする。

予備調査

<目的>

発言場面における言えない要因として、畑中(2003)の5側面以外の要因があるかを探索的に検討する。また、本調査において実際の発言行動や葛藤について尋ねる際に用いる、発言抑制が生じる会話状況のリストを作成するために、項目を収集することを目的とする。

<方法>

調査対象 福岡県内のF大学の女子学生118名を対象に質問紙調査を行った。調査時期は2013年であり、授業時間の一部を使用し、集団法により実施した。

質問紙の構成 演習場면을提示し、回答を求めた。

(1) 演習場面

少人数で行う演習の場面を設定した。言いたい気持ちがあり、何を言えばいいかも分かっていることとし、その時に実際に発言できるかどうかを尋ねた。また、発言出来ない場合はどうして出来ないのかを自由記述で尋ねた。さらに、気持ちを伝える相手として、どのような関係の人物を想起したか、用意した項目の中から選択するよう求めた。

(2) 発言抑制が生じる会話状況

2～3ヶ月のうち、友人との1対1の会話の中で、言いたいのに言えなかった経験があったかどうか問い、あった場合は具体的な状況を記述してもらった。

<結果>

言えない要因

演習場面で発言できない要因を整理し、まとめた結果、友人との会話場面の予備調査結果(上瀧・重橋, 2015)と異なり、畑中の5側面(相手志向、自分志向、関係距離確保、規範・状況、スキル不足)の内、自分志向とスキル不足のみが該当した。特に演習場面では、自分志向を要因として挙げた者が多く、演習場面において自分志向が発言抑制に影響していると考えられる。自分志向による発言抑制は自分の利益や自尊心維持のために行われるものであり、理想自己や現実自己と関係しているのではないかと先述したが、予備調査の結果はこれらの仮説を支持するものであり、演習場面において理想自己と現実自己の差がより顕著に表れることも示唆された。また、「周囲の視線」「正解しなければならない思い」等のその他の項目も多く、演習場面特有の発言抑制要因があることが示唆された。

発言抑制が生じる会話状況

得られた回答を分類し、本調査で使用した。

本調査

<方法>

1. **調査対象**：福岡県内のF大学の学生222名を対象に質問紙調査を行った。調査時期は2013年であり、授業時間の一部を使用し、集団法により実施した。分析対象は222名である。

2. 質問紙の構成

実際の発言行動・葛藤：畑中(2006)の発言抑制が生じる会話状況を参考に、予備調査の結果をふまえて作成した。正答のない内容について発言することが求められる状況にあることを想起させた上で、項目ごとに相手との関係、発言する内容を示し、それぞれの状況にある時に発言することを迷うかどうか、また実際に言うかどうかを尋ねた。関係性はポジティブなものとネガティブなもの2種類、内容はポジティブなもの、ネガティブなもの、個人的なもの3種類である。使用した項目は、「自分の意見を理解してくれそうな人の中で、自慢話をする」、「自分の意見を理解してくれなさそうな人の中で、率直な考えを話す」などの全12項目である。実際の発言行動は“言う(1点)”と“言わない(2点)”の2件法、葛藤も“迷う(1点)”と“迷わない(2点)”の2件法で回答を求めた。得点が高いほど言わない、または葛藤しないと捉えた。実際に使用した項目をTable2に示す。

言えない要因：予備調査結果を基に、畑中(2003)の5側面にあてはまる項目をそれぞれ1項目と、それ以外の項目を6項目用い、言えない要因を尋ねた。実際の発言行動について回答した際、1つでも“言わない”と答えた者に回答を求めた。使用した項目は、「相手に深入りしてほしくなく、距離をとりたいたから(関係距

離確保)」、「場の雰囲気を壊したくないから(規範・状況)」などの全11項目である。各項目について、“まったくあてはまらない(1点)”から“よくあてはまる(5点)”の5件法で回答を求めた。実際に使用した項目をTable1に示す。

評価懸念：岡田・渡田(1992)の評価懸念予備尺度(30項目)から、「否定的評価への懸念・回避」因子全10項目、「評価場面についての意識」因子4項目(1項目削除)を使用した。各項目について、“まったくあてはまらない(1点)”から“よくあてはまる(5点)”の5件法で回答を求めた。

理想自己・現実自己のズレ：実際の発言行動と葛藤について尋ねた際に想起させた場面で「こうありたい」と思

う理想の姿を3つ書いてもらった。思い浮かばない場合は、選択肢から選んでもらった。さらに、それぞれの理想の姿に対して今の自分はどの程度当てはまるか、“まったくあてはまらない(5点)”から“よくあてはまる(1点)”の5件法で回答を求め、得点が高いほど理想自己と現実自己のズレが大きいと捉えた。

<結果>

1. 発言行動尺度と葛藤尺度の因子分析

主因子法プロマックス回転による因子分析を行った。スクリープロット法により3因子が妥当であると判断されたため、因子数を3に固定し、同様の因子分析を行った。さらに因子負荷量の低い(0.3以下)4項目を除外し、

Table1 言えない要因の項目

	項目
言えない 要因	1.反対意見を言ったら、相手が傷つくかもしれないから
	2.自分の発言を否定されるのが怖く、拒否されることに不安があるから
	3.相手に深入りしてほしくなく、距離をとりたいたから
	4.場の雰囲気を壊したくないから
	5.言いたいことをうまく言えないことがあるから
	6.恥ずかしいから
	7.相手との関係を壊したくないから
	8.周りからの視線が気になる
	9.誰かが発言するだろうと、他人に任せてしまうから
	10.正しい答えを言わなければならないという思いがあるから
	11.発言すると、自分の考えに対する責任をもたないといけないから

Table2 演習場面における発言行動尺度および葛藤尺度の因子負荷量

	項目	F1	F2	F3	共通性
発言 行動	意見の主張 $\alpha = .62$				
	11 自分の意見を理解してくれなさそうな人の中で、率直な考えを話す	.672	-.064	-.051	.419
	8 自分の意見を理解してくれなさそうな人の中で、誰かに反対意見を言う	.565	-.087	.142	.393
	5 自分の意見を理解してくれそうな人の中で、率直な考えを話す	.502	.095	-.100	.236
	2 自分の意見を理解してくれそうな人の中で、誰かに反対意見を言う	.399	.146	.068	.232
	個人的体験の表明 $\alpha = .69$				
	3 自分の意見を理解してくれそうな人の中で、辛い思い出を話す	.034	.835	-.081	.667
	6 自分の意見を理解してくれそうな人の中で、自分の個人的な問題を話す	-.009	.610	.091	.414
	差別的な発言 $\alpha = .58$				
	10 自分の意見を理解してくれなさそうな人の中で、差別的な考えを話す	.014	-.116	.714	.477
葛 藤	4 自分の意見を理解してくれそうな人の中で、差別的な考えを話す	-.038	.176	.673	.539
	理解者がいる場での発言 $\alpha = .71$				
	10 自分の意見を理解してくれなさそうな人の中で、差別的な考えを話す	.952	-.118		.853
	9 自分の意見を理解してくれそうな人の中で、辛い思い出を話す	.920	-.076		.805
	7 自分の意見を理解してくれそうな人の中で、自慢話をする	.886	-.063		.750
	12 自分の意見を理解してくれなさそうな人の中で、自分の個人的な問題を話す	.829	.098		.751
	8 自分の意見を理解してくれなさそうな人の中で、誰かに反対意見を言う	.416	.233		.294
	4 自分の意見を理解してくれそうな人の中で、差別的な考えを話す	.380	.374		.381
	非理解者がいる場での発言 $\alpha = .88$				
	2 自分の意見を理解してくれそうな人の中で、誰かに反対意見を言う	-.163	.670		.401
	6 自分の意見を理解してくれそうな人の中で、自分の個人的な問題を話す	.114	.647		.482
	3 自分の意見を理解してくれそうな人の中で、辛い思い出を話す	.133	.588		.416
	5 自分の意見を理解してくれそうな人の中で、率直な考えを話す	-.307	.532		.266
	1 自分の意見を理解してくれなさそうな人の中で、自慢話をする	.143	.427		.244
	11 自分の意見を理解してくれなさそうな人の中で、率直な考えを話す	.205	.399		.257

再度因子分析を行った。結果を Table2 に示す。

第1因子は「自分の意見を理解してくれそうな人がいる中で、誰かに反対意見を言う」、「自分の意見を理解してくれなさそうな人がいる中で、率直な考えを話す」などの4項目に高い負荷がみられたため、「意見の主張」因子と命名した。第2因子は「自分の意見を理解してくれそうな人がいる中で、辛い思い出を話す」、「自分の意見を理解してくれそうな人がいる中で、自分の個人的な問題を話す」など2項目に高い負荷が見られたため、「個人的体験の表明」因子と命名した。第3因子は「自分の意見を理解してくれそうな人がいる中で、差別的な考えを話す」などの2項目に高い負荷が見られたため、「差別的な発言」因子と命名した。

次に葛藤について因子分析を行った。主因子法プロマックス回転による因子分析を行った。スクリープロット法により2因子が妥当であると判断されたため、因子数を2に固定し、同様の因子分析を行った。どの項目も因子負荷量が.35以上となった。結果を Table2 に示す。

第1因子は「自分の意見を理解してくれそうな人がいる中で、自慢話をする」、「自分の意見を理解してくれそうな人がいる中で、誰かに反対意見を言う」などの6項目に高い負荷がみられたため、「理解者のいる場での発言」因子と命名した。第2因子は「自分の意見を理解してくれなさそうな人がいる中で、辛い思い出を話す」、「自分の意見を理解してくれなさそうな人がいる中で、自分の個人的な問題を話す」など6項目に高い負荷が見られたため、「非理解者のいる場面での発言」因子と命名した。

2. 分散分析

群分け 評価懸念尺度、発言行動尺度、葛藤尺度の平均点を基準に、高群と低群の2群を設定した。評価懸念尺度の平均は46.24（高群:106人、低群:116人）であった。演習場面の発言行動尺度は、平均点は12.52（高群:110人、低群:112人）であり、葛藤尺度の平均は18.75（高群:99人、低群:123人）であった。なお、発言行動の得点の高群を以下発言行動有群、低群を発言行動無群と記載する。また、発言行動尺度と葛藤尺度は、因子別にも平均点を基準に、高群と低群の2群を設定した。

（1）評価懸念の高さと発言行動による理想自己と現実自己のズレ

周りからの評価を気にする程度と実際の発言行動によって、その人が意識している理想自己と現実自己のズレに違いがあるのかを調べるために、評価懸念（高・低）と発言行動（有・無）を独立変数とし、理想自己と現実自己のズレを従属変数とする2要因の分散分析を行った。分散分析の結果は Table3 である。

発言行動尺度全項目の分析の結果、評価懸念 ($F(1,221)=5.06$, $p < .01$) と発言行動 ($F(1,221)=6.39$, $p < .01$) の主効果が有意であり、評価懸念高群が低群

よりも得点が高く、発言行動無群が発言行動有群よりも得点が高かった。つまり、周りからの評価を気にする人ほど、また発言しない人ほど、理想自己と現実自己のズレが大きいといえる。

次に、発言行動尺度の因子別の分析の結果、「意見の主張」は、評価懸念の主効果 ($F(1,221)=4.79$, $p < .05$) が有意であり、評価懸念高群が低群よりも得点が高かった。「個人的体験の表明」では、評価懸念 ($F(1,221)=6.44$, $p < .05$) の主効果が有意であり、評価懸念高群が低群よりも得点が高かった。「差別的な発言」では有意な差はなかった。これより、周りからの評価を気にする人ほど、理想自己と現実自己のズレが大きいといえる。また、「意見の主張」や「自分の個人的な体験」について伝える場合、評価懸念が高い人は低い人に比べ理想自己と現実自己のズレが大きいことが示された。各因子とも交互作用は有意ではなかった。

（2）評価懸念の高さと発言行動による言えない要因

周りからの評価を気にする程度と実際の発言行動によって、言えない場合にどのような要因が影響しているのかを調べるために、評価懸念（高・低）と発言行動（有・無）を独立変数とし、言えない要因を気にする程度を従属変数とする2要因の分散分析を行った。分析の結果は Table4 に示す。

Table4 より、11項目中「誰かが発言するだろうと、他人に任せてしまうから」「発言すると自分の考えに対する責任を持たないといけないから」以外の9項目全ての評価懸念に主効果が認められた。順に、「反対意見を言ったら、相手が傷つくかもしれないから ($F(1,221)=21.03$, $p < .01$)」、「反対意見を言ったら、相手が傷つくかもしれないから ($F(1,221)=21.03$, $p < .01$)」、「自分の発言を否定されるのが怖く、拒否されることに不安があるから ($F(1,221)=66.92$, $p < .01$)」、「相手に深入りしてほしくなく、距離をとりたいから ($F(1,221)=9.51$, $p < .01$)」、「場の雰囲気壊したくないから ($F(1,221)=11.67$, $p < .01$)」、「言いたいことをうまく言えないことがあるから ($F(1,221)=9.27$, $p < .01$)」、「恥ずかしいから ($F(1,221)=9.96$, $p < .01$)」、「相手との関係を壊したくないから ($F(1,221)=12.93$, $p < .01$)」、「周りからの視線が気になる ($F(1,221)=75.87$, $p < .01$)」、「正しい答えを言わなければならないという思いがあるから ($F(1,221)=1843$, $p < .01$)」であった。

これより、畑中 (2003) の5側面にあてはまる項目「相手志向、自分志向、関係距離確保、規範・状況、スキル不足」に加えて、「恥ずかしいから」「周りからの視線が気になる」「正しい答えを言わなければならないという思いがあるから」など様々な発言抑制要因を、評価懸念が高い人は低い人よりも感じていることが示された。

（3）評価懸念の高さと発言行動による葛藤

周りからの評価を気にする程度と実際の発言行動によって、葛藤の高さに差があるかを調べるために、評価

Table3 理想自己・現実自己のズレの評価懸念・発言行動による2要因分散分析

		評価懸念		主効果		交互作用
		高群 平均	低群 平均	評価懸念 F値	発言行動 F値	F値
発言行動全項目	有群	9.08	7.90	5.06**	6.39**	1.23
	無群	9.59	9.18			
意見の主張	有群	8.94	8.12	4.79*	3.38 [▲]	0.22
	無群	9.56	9.07			
個人的体験の表明	有群	8.75	8.16	6.44*	1.54	0.14
	無群	9.54	9.22			
差別的な発言	有群	8.63	7.94	3.64 [▲]	0.82	0.20
	無群	9.38	9.14			

[▲]p<.10, *p<.05, **p<.01

Table4 言えない要因の評価懸念・発言行動による2要因分散分析

	発言行動有群		発言行動無群		主効果		交互作用
	評価懸念 高群 平均	低群 平均	評価懸念 高群 平均	低群 平均	評価懸念 F値	発言行動 F値	F値
反対意見を言ったら、相手が傷つくかもしれないから	3.35	2.88	3.44	2.69	21.03**	0.13	1.04
自分の発言を否定されるのが怖く、拒否されることに不安があるから	3.67	2.63	3.81	2.67	66.92**	0.46	0.17
相手に深入りしてほしくなく、距離をとりたから	3.38	2.86	3.52	3.11	9.51**	1.77	0.13
場の雰囲気壊したくないから	3.79	3.59	4.04	3.37	11.67**	0.01	3.31 [▲]
言いたいことをうまく言えないことがあるから	3.44	2.91	3.42	3.04	9.27**	0.14	0.23
恥ずかしいから	2.90	2.21	2.87	2.62	9.96**	1.6	2.16
相手との関係を壊したくないから	3.42	3.07	3.48	2.81	12.93**	0.49	1.33
周りからの視線が気になる	3.92	2.84	4.10	2.96	75.87**	1.37	0.05
誰かが発言するだろうと、他人に任せちゃうから	3.42	3.21	3.69	3.47	1.85	2.94 [▲]	0
正しい答えを言わなければならないという思いがあるから	3.25	2.67	3.48	3.25	18.43**	2.58	0
発言すると、自分の考えに対する責任をもたないといけないから	3.17	2.98	3.42	3.09	3.53 [▲]	1.82	0.28

[▲]p<.10, *p<.05, **p<.01

懸念（高・低）と発言行動（有・無）を独立変数とし、葛藤を従属変数とする2要因の分散分析を行った。分散分析の結果をTable5に示す。

発言行動尺度の全項目の分析の結果、評価懸念の主効果が有意であり ($F(1,221)=6.21, p<.05$)、評価懸念低群の方が高群よりも得点が高かった。つまり、周りからの評価を気にしない人ほど、相手に自分の気持ちや考

えを伝える時に葛藤しないと言える。次に、因子別の分析の結果、「理解者のいる場での発言」は評価懸念の主効果が有意であり ($F(1,221)=16.44, p<.01$)、評価懸念低群の方が高群よりも得点が高かった。「非理解者のいる場での発言」では発言行動の主効果が有意であり ($F(1,221)=10.57, p<.01$)、発言行動無群の方が有群よりも得点が高かった。これより、演習場面で理解者がい

Table5 葛藤の評価懸念・発言行動による2要因分散分析

	発言行動有群		発言行動無群		主効果		交互作用
	評価懸念 高群 平均	低群 平均	評価懸念 高群 平均	低群 平均	評価懸念 F値	発言行動 F値	
葛藤全項目	17.85	18.93	18.55	19.76	6.21*	2.45	0.01
理解者のいる場での発言	8.6	9.47	8.23	9.42	16.44**	0.71	0.43
非理解者のいる場での発言	9.18	9.52	10.32	10.35	0.35	10.57**	0.26

▲ $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$

Table6 理想自己・現実自己のズレの評価懸念・葛藤による2要因分散分析

		評価懸念		主効果		交互作用
		高群 平均	低群 平均	評価懸念 F値	葛藤 F値	
葛藤全項目	高群	8.19	7.28	5.80*	2.97▲	0.44
	低群	7.55	6.28			
理解者のいる場での発言	高群	7.57	7.15	4.81*	0.29	0.08
	低群	7.23	6.63			
非理解者のいる場での発言	高群	7.35	6.59	4.78*	4.27*	0.15
	低群	6.22	5.96			

▲ $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$

る場合は、周りからの評価を気にする人は相手に自分の気持ちや考えを伝える時に葛藤するが、批判的な人がある場合は評価懸念の高低によって葛藤に差がないといえる。また、演習場面で自分の考えを理解してくれない人がある場合、自分の気持ちや考え・意見などを言う人は言わない人に比べて、葛藤することが示された。

(4) 評価懸念の高さと葛藤による理想自己と現実自己のズレ

周りからの評価を気にする程度と、発言する際の葛藤の程度によって、その人が意識している理想自己と現実自己のズレに違いがあるのかを調べるために、評価懸念(高・低)と葛藤(高・低)を独立変数とし、理想自己と現実自己のズレを従属変数とする2要因の分散分析を行った。分散分析の結果をTable6に示す。

葛藤尺度全項目の分析の結果、評価懸念の主効果($F(1,221)=5.08$, $p < .05$)が有意であり、評価懸念高群が低群よりも得点が高かった。因子別に分析した結果、「理解者のいる場での発言」は評価懸念の主効果が有意であり($F(1,221)=4.81$, $p < .05$)、評価懸念高群の方が低群よりも得点が高かった。つまり、理解者がいる演習場面では周りからの評価を気にする人は気にしない人に比べて、理想自己と現実自己の差があることが示された。「非理解者のいる場での発言」では、評価懸念($F(1,221)=4.78$, $p < .05$)と葛藤($F(1,221)=4.27$, $p < .05$)に主効果が見られ、評価懸念高群が低群よりも得

点が高く、葛藤しない群が葛藤する群よりも得点が高かった。つまり自分の意見に理解してくれない人がある演習場面では、周りからの評価を気にする人とその場での発言に葛藤しない人ほど、理想自己と現実自己のズレに差があることが示された。

<考察>

結果から、評価懸念が高い人ほど理想自己と現実自己にズレがあることが明らかになった。発言内容別の結果からは、意見の主張や個人的な意見の表明を行う場合に、評価懸念が高い人は理想自己と現実自己のズレが大きいことが示された。また関係性の点では、演習場面に理解者がいるかどうかに関わらず、評価懸念の高い人は理想自己と現実自己のズレが大きいことが示された。発言行動の有無では、自分の気持ちや考えを言わない人は全般的にズレが大きいことが示された。これより、評価懸念の高い人は、大学の演習において理想と現実のズレにつらさを感じやすく、理解者の存在だけではそのズレは解消しがたいことが示された。特に、意見表明など反対意見を言う場面や個人的な体験を話す時にズレを大きく意識することから、純粋な自分の気持ちや考えを伝える時に理想と現実のズレが生じやすいといえる。

評価懸念の高さと発言行動の有無によって発言抑制の要因に差があるか検討した結果、「誰かが発言するだろ

うと他人に任せてしまうから」「発言すると自分の考えに対する責任を持たないといけないから」以外は、全て評価懸念が高い人ほど気にしていることがわかった。これは、友人場面における発言行動と評価懸念との関係を検討した上瀧ら（2015）の結果と一部異なる結果となった。友人場面では、畑中（2003）の発言抑制5側面の内、「自分志向」「関係距離確保」「スキル不足」の3項目を評価懸念の高い人は気にしていたが、「相手志向」「規範・状況」では評価懸念の高さと差は見られなかった（上瀧・重橋，2015）。しかし、演習場面では5側面全てにおいて評価懸念が高い人は低い人より気にしていた。「自分志向」「関係距離確保」「スキル不足」の3項目は、自分の利益や自尊心維持のために行われるものである（畑中2003）。一方、「相手志向」は相手の負担になることや不快な思いをさせたくないという項目で「相手」のことを考えての発言抑制、「規範・状況」は場の雰囲気を壊したくないという場への配慮であり、どちらも利他的な発言抑制である。演習場面では、評価懸念が高い人は自分志向だけではなく他者志向的な配慮による抑制も起こりやすいといえる。

演習場面は、親しい友人場面とは異なり複数の他者が存在すること、その中には多様な価値観を有する者もあり、自分が意見を言うことで雰囲気が冷めてしまうことを恐れ、相手を傷つけないかという意識が評価を気にする人には生じやすいと考えられる。また、演習場面では数値を伴った評価が下されることが明かであり、教員という明確な評価者がおり、自己志向的な発言抑制も起こりやすい。そのため、自己志向的な理由と他者配慮の理由から、評価懸念者は適応の手段として言わない選択を行いやすいと考えられる。最近授業中に積極的に発言する学生があまりいないこと（生田・丸野・加藤，2001）、空気を読むという言葉が広く用いられているように場の雰囲気を壊さないように若者が行動しやすい傾向があることなどを考えると、演習場面で口を閉ざす行為は同世代の大学生の関係の中では、むしろ適応的な行為ともいえる。しかしながら、極端な発言抑制行動は周囲からは考えを理解されず、自分の考えを述べないことを批判されるなど、必ずしも適応的とは言えない側面がある。

評価懸念の高さと発言行動によって葛藤に差があるかについて考察する。評価懸念が高い人は、基本的にはどのような場面でも葛藤を感じているが、自分の意見を理解してくれる人がある中で自分の気持ちや考えを伝える時に葛藤することが明らかになった。自分の意見を理解してくれる人は、大切にしたい存在であり、失うのは避けたいと考える対象であろう。理解者に自分の意見を否定される不安から、評価懸念が高い者は葛藤が生じると考えられる。一方、評価懸念が低い人は理解者がいる場面では葛藤することが少ないことから、安心して発言を行っていると考えられる。また、「非理解者がいる場面」

すなわち批判的な人がある場面では評価懸念の高低で差がなかったことから、批判される場面では言うか言わないかに迷いがなく葛藤が生じにくい、理解者がいる場では安心感があることから発言しようと動機づけが高まることでむしろ葛藤が生じやすいと考えられる。これらの結果は、友人場面における「仲の良い人」「仲の悪い人」への発言行動の結果と一致する（上瀧・重橋，2015）。

また、発言行動に関しては、「非理解者がいる場面」で自分の気持ちや考えを言う人ほど、発言することを葛藤することがわかった。演習場面で理解してくれる人がいない場面で発言することは勇気が必要で、そのような状況では発言する人の方に迷いが生じることが理解できる。この結果も友人の会話場面結果と一致するものであった。

理想自己・現実自己のズレと評価懸念・葛藤との関係について考察する。評価懸念が高い人は、どの場面でも理想自己と現実自己の差が大きい。また、「非理解者がいる場面」において発言行動に葛藤をしない人は、理想自己と現実自己に差があることがわかった。演習場面は友人との会話場面とは異なり、複数の人がいる場であり一般的には、友人場面に比べて人に任せようとする思いが強くなると考えられる。また、「非理解者がいる場面」ということから、相手との考え方の違いを感じていると考えられ、どうせ言っても無駄だと諦め、葛藤しないと考えられる。ただし、どこかで分かってほしいという思いから、すぐにあきらめてしまう自分に対して、理想自己との差を感じていることが推察される。

以上より、評価懸念が高い人ほど、理想自己と現実自己のズレが大きく、様々な要因によって言えない気持ちを抱えていることが明らかになった。実際に発言しているかに関わらず言えなさを感じているとすれば、内的な要因である評価懸念の影響が大きいことが示唆された。

友人場面と演習場面の共通点は、評価懸念の高さが発言行動に関する理想自己と現実自己に関係することであった。「理解者がいる状況」における結果から、自分の気持ちや考えを伝える時、受容してくれる周りの雰囲気など外的な要因が整っていることは大切だといえる。しかしそれ以上に、本人の内的な要因が大きく影響していると考えられる。評価懸念者の理想自己と現実自己の差を小さくする関わりが大切になると考えられる。

演習場面特有なところは、教員という明確な評価者がおり、また関係性が様々な複数の他者が存在することから、評価懸念が高い者にとって友人場面以上に多くの発言抑制要因が影響する可能性である。演習場面において発言を促すことは難しい面が多い。しかし、高い評価懸念を持ちながらも、実際に発言している人もいる。そこには、どのような要因が働き、何が力になっているのだろうか。この点を明らかにすることは、言えなさを感じる人に対する支援を考える必要な点である。本研究では明らかにしておらず、今後の検討課題である。

付記

1 元福岡女学院大学大学院人文科学研究科臨床心理学
専攻大学院生

＜引用・参考文献＞

生田淳一・丸野俊一・加藤和生 2001 大学生の授業中の発言
スタイル (2) 日本教育心理学会総会発表論文集 **43**, 273
岡田努・永井徹 1990 青年期の自己評価と対人恐怖的心性との
関連 **60**, 6, 386-389
岡田守弘・渡田典子 1992 評価懸念および自己制御感から観
た児童の学校不適応感の測定について 横浜国立大学教育
紀要 **32**, 151-187
岡野憲一郎 1998 恥と自己愛の精神分析ー対人恐怖から差別
論までー 岩崎学術出版社
倉島 2009 教育臨床論ー教師を目指す人のためにー 第10
章 批評社

上瀧惇子・重橋のぞみ 2015 大学生の友人との会話場面にお
ける理想自己・現実自己の差と発言行動との関連ー評価懸
念という視点を取り入れてー 福岡女学院大学大学院紀要
臨床心理学 **12**, 55-63
清水健司・海塚敏郎 2002 青年期における対人恐怖心性と自
己愛の関連 教育心理学研究 **50**, 54-64
畑中美穂 2003 会話場面における発言の抑制が精神的健康に
及ぼす影響 心理学研究 **74**, 2
畑中美穂 2006 発言抑制行動に至る意思決定過程：発言抑制
行動時の意識内容に基づく研究 社会心理学研究 **21**, 3,
187-200
堀憲一郎・丸野俊一・加藤和生 2002 授業場面に潜む“暗黙
のルール”と発言スタイルとの関連 日本教育心理学総会
発表論文集 **44**, 434
Watson, D. & Friend, R. 1969 Measurement of social-
evaluative anxiety. Journal of Consulting and Clinical
Psychology, **33**, 448-457